

コロンビアの昆虫

加野 正

はじめに

筆者は、1985年4月にネパールのカトマンズ周辺に採集旅行を試みたが、トラブルもあり1か月ほどで帰国した。仕事のほうはすでに辞めており、その後何となく無為な日々を過ごしていた。もう一度、海外に長期の採集旅行も考えたが、資金的に苦しいところであった。

その秋、何気なく読んでいた新聞で海外青年協力隊（JOCV, Japan Overseas Cooperation Volunteers）隊員募集の広告が目についた。JOCVについてはその存在は知っていたものの、“青年”とある以上、当時32歳の私にその資格があるとは思えなかった。しかし、よく読んでみると“参加資格35歳まで”とある。ただで海外に行け、生活費の心配もなく2年間虫採りができるなんて、こんな話はそうない。募集要項を取り寄せてみると、“病虫害”の職種もあり、アフリカのガーナ、ニジェールそれに中米のホンジュラスに募集があった。大学院を出てすでに6年近くが経過しており、あまり自信はなかったものの、さっそく応募した。

翌1986年1月に1次試験にパスし、2月に東京にて2次試験の面接を受け、3月に入り合格通知を受け取った。派遣国は南米コロンビアであった。4月より3か月の訓練（スペイン語ほか）を受けるために上京。厳しいと聞いていた訓練もさほどではなく、スペイン語の上達は別としても結構楽しく過ごし、7月30日、メキシコに向けて成田空港を出発した。メキシコでの1か月半の語学研修（私にとっては虫の採集研修？）の後、9月15日、コロンビアの首都ボゴタ（Bogota）に到着。

ボゴタについてみると、高層ビルの林立する大都会である。少々落胆した。また、配属先のINDERENA（自然資源庁）は変わらないものの、仕事の内容は樹木病理から昆虫に、任地はボゴタからメデリン（Medellin）に変わっていた。メデリンはボゴタより暖かく、仕事も昆虫関係とのことで、まずは納得して任地に赴いた。メデリンに来てみると、研究所のあるピエドラス・ブランカス（Piedras Blancas, 以下P/Blancasと略）は山の上にあり、ボゴタより寒い。おまけに、周囲はマツやイトスギの植林地と牧草地ばかりである。少々がっかりした。

研究テーマは、マツ *Pinus patula* につくシャクガ科害虫 *Oxydia trychiata* の生態学的研究と国立自然公園の昆虫相調査の2つに決定した。しかし、配属先に資金がなく、思うようにフィールドに行けず、現在では後者を中心に行っている。

コロンビアに赴任後、すでに1年半が経過したが、まだ思うようには採集できていない。以下に研究所のある P/Blancas, 国立自然公園“ロスカティオス”(“Los Katios”) およびチエコ州(Choco)の昆虫について、チョウと甲虫を中心に紹介したい。現在、データをまとめている最中で、不十分なものであるが御了承願いたい。

1. コロンビアの概観

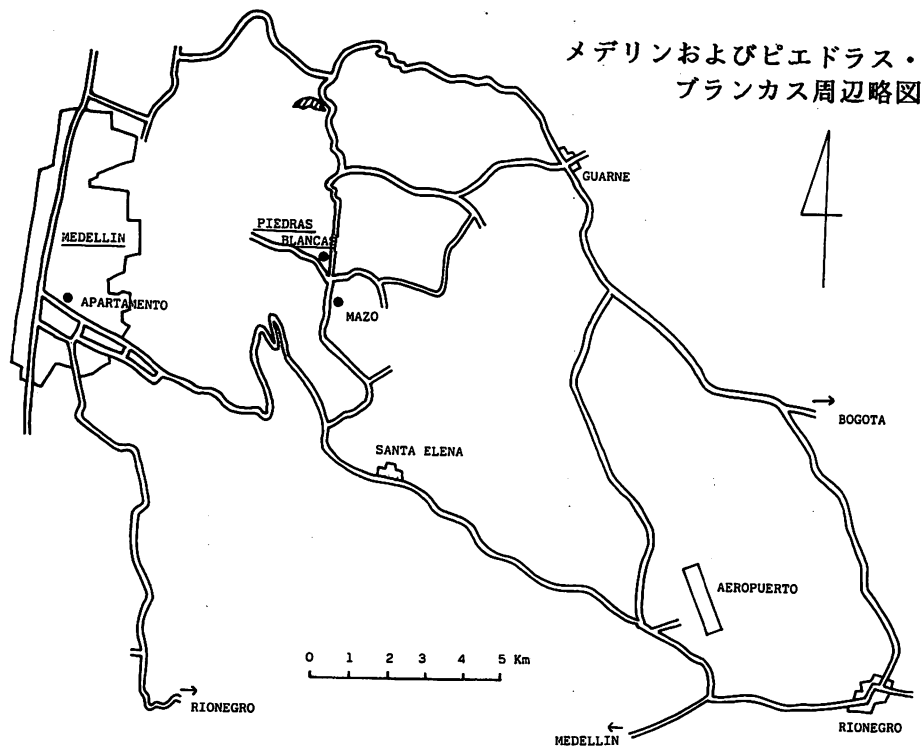
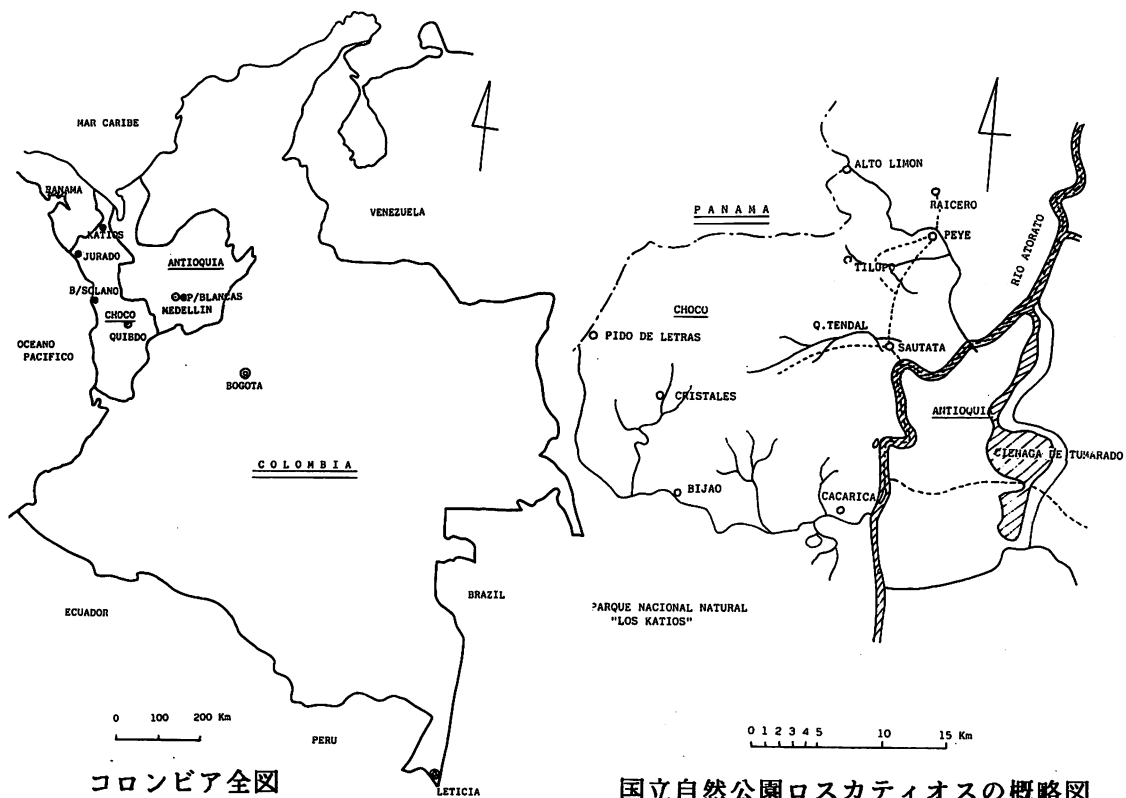
本題に入る前に、コロンビアおよび関連地名について簡単に記しておく。

1. コロンビア共和国 (La Republica de Colombia)

南米大陸の西北端、中米とをつなぐ南米大陸の入口に位置し、面積約114万km²、人口約33百万人(1984年時点)である。南米諸国では唯一、太平洋と大西洋(カリブ海)に面し、熱帯多雨の太平洋沿岸、サバンナ気候のカリブ海沿岸、東部の平原地域(Llano)、アマゾンの大森林地帯、それにアンデス山脈(Los Andes)と多様な地理的特徴を有し、それを反映して動植物相も豊かである。アンデス山脈は、コロンビアに至り東部山脈(Cordillera・Oriental)、中央山脈(C.Central)、西部山脈(C.Occidental)に分かれる。コロンビアはコーヒー、エメラルドの産地として有名であるが、我々虫屋にとっては、ヘラクレスオオカブト(*Dinastes hercules*)、ネプチューンオオカブト(*D.neptunus*)、ゾウカブト(*Megasoma elephas*)、それにモルフォチョウ(*Morpho*)、ミイロタテハ(*Agrias*)といったところでなじみ深い。

2. ボゴタ (Bogota)

コロンビアの首都で、国土のほぼ中央、東部山脈の標高約2,650mの高地に位置し、人口700万人もいるといわれる近代的な高層ビルの林立する都市である。ボゴタの東側は、観光地のモンセラテ(Montserate)をはじめとして、3,000m以上の山地で、木も多く山地性の虫が見られそうであるが、未調査である。



3. アンティオキア州 (Antioquia)

メデリン (Medellin) …アンティオキア州の州都。ボゴタの北西約250km (ボゴタよりバス約10時間、飛行機約20分)、中央山脈と西部山脈にはさまれた谷間に発達したコロンビア第2の都市で、商工業の中心地である。標高1,500m前後で日本の初夏のような気候。山の斜面や台地には村が点在し、林もあり、採集できそうである。ただし、メデリンはマフィアの中心地で、コカインの精製場が山地のいたるところにあり、けっこうヤバイ。

ピエドラス・ブランカス (Piedras Blancas, 以下 P/Blancasと略) …メデリン市の東側。車で約1時間山を登ったところにある。標高約2,450mで気候的には日本の晩秋といったところ。ここに私の仕事場の研究所と住居 (カバーニャ, Cabana) がある。周囲はマツ・イトスギ類の植林地、牧場で、所々にカシ類の二次林がある。

4. チェコ州 (Choco)

太平洋岸に面した、パナマと国境を接する南米のつけ根に位置する。コロンビアでも比較的開発の遅れた地域で、世界でも有数の多雨地帯で年間降水量8,000mmとか10,000mmというところもあり、中心を流れるアトラト川 (Rio Atrato) は世界でも有数の流量をほこる。熱帯多雨林が全州をおおっている感じである。マラリアも多い。

キブド (Quibdo) …チェコ州の州都。年間降水量8,000mmといわれながら、水不足という不思議なところ。アトラト川中流に発達した町で、周囲は熱帯多雨林におおわれており、好採集地と思われるが調査の機会を得ていない。

バイア・ソラノ (Bahia Solano, 以下 B/Solanoと略) …その名 (ソラノ湾の意味) のとおり、太平洋岸の町。メデリンより軽飛行機で約1時間、海水浴や海釣りのための観光地の1つ。陸路はなく、交通機関は船と飛行機のみである。海岸付近まで山が迫り、熱帯多雨林に囲まれている。そのせいか短い谷川が多く、コロンビアでは珍しく水のきれいなところである。

フラド (Jurado) …パナマ国境に近い太平洋岸の町。バイア・ソラノより小舟で約4時間ほど北上したところにある。交通ルートは海路のみ。周囲は熱帯多雨林に囲まれているが、陸路がないためカヌーで移動する。河口付近にはマングローブ林が発達し、砂浜沿いにはココヤシが多く、なかなかロマンチックなところである。ただし水には恵まれず、交通の便が悪いのが難

点。ここよりフラド川 (Rio Jurado) 、ハンパバド川 (Rio Janpavado) を船外機付カヌーで3~4時間遡ったところにインディオ (Indio) の村があり、調査地の1つである。

5. 国立自然公園 “ロスカティオス” (Parque Nacional Natural “Los Katios”)

アンティオキア・チェコ両州にまたがる国立自然公園で、アトラト川流域にあり、パナマと国境を接する。標高50~600mの熱帯多雨林で、中米と南米の接点にあり、ダリエン (Darien) とも呼ばれる。パナマ運河構築の際、候補地の1つであった。小栗虫太郎の推理冒険小説「人外魔境」にも登場したところで、サンクード (Zancudo、ヤブカの1種)、マラリア、黄熱病の巣とか。ただし、動植物相も豊富。

II. メデリン (Medellin) 周辺

1. ピエドラス・ブランカス (P/Blancas) の昆虫

P/Blancasの昆虫については、但馬むしの会連絡誌「混蟲ずかん」No.16 (1987年4月5日発行) に《コロンビア便り その2》として掲載されたが、ここでもう一度触れておこう。

前述したように、P/Blancasはアンデス山脈の北端に位置し、標高2,450m前後で少々寒い。それゆえ、南米らしい派手な虫は少なく、比較的高地に生息する種やPeru Andesとの共通種も多いようである。メデリン (標高1,500m前後) まで下ると虫の顔ぶれも変わり、低地性のものが多くなる。2,000m前後に昆虫相を分けるラインが引き得るように思える。

まずはチョウを中心に、P/Blancas周辺の昆虫を概観してみよう。

Papilionidae (アゲハチョウ科) : P/Blancasでは非常に少なく、Papilio sp. (キアゲハのくすんだ春型といった種) 1種のみ。メデリンではこのほか、P.thoas や Eurytides sp. も見られ、P/Blancasのものはメデリンなど山の下から飛来してきたものかもしれない。

Pieridae (シロチョウ科) : Dismorphia属、Mathania属、Colias属、Phoebis属、Eurema属、Catasticta属、Leodonta属、Leptophobia属などが見られ、種類はけっこう多い。Leptophobiaの1種はモンシロチョウに似ており、やはりキャベツなどアブラナ科蔬菜の害虫である。ただ、産卵は卵塊で行

い、生態的にはヨーロッパのオオモンシロチョウ *P. brassicae* により近い。メデリンあたりでは、*Eurema* 属、*Phoebis* 属が種類数、個体数とも増加し、*Colias* 属は姿を消す。

Danaidae (マダラチョウ科) : *Danaus plexippus* (オオカバマダラ) 1 種のみ。

Ithomidae (トンボマダラ科) : *Eutresis* 属、*Thyridia* 属などが見られる。

Th. aedesis は、Tomate de arbol (ナス科果樹) の害虫。

Heliconidae (ドクチョウ科) : *Agraulis vanillae*, *Heliconius* 属など。

Heliconius は現在のところ 1 種のみ。メデリン周辺では種類数は多くなり、*Dryas julis* も現れる。

Satyridae (ジャノメチョウ科) : *Euptychia* 属、*Pronophila* 属、*Mygona* 属、*Lasiophila* (?) 属、*Corades* 属など。種類数、個体数とも多いほうである。

Brassolidae (フクロウチョウ科) : P/Blancas での採集例はない。メデリン付近にて、*Caligo* sp. を何頭か目撃しているほか、*Opsiphanes sallei* を得ている。

Morphidae (モルフォチョウ科) : P/Blancas では *Morpho stofferi* (?) 1 種のみ。メデリンではほかの *Morpho* sp. も見かけるが、採集の機会に恵まれていない。

Nymphalidae (タテハチョウ科) : *Phyciodes* 属、*Epiphele* 属、*Perisama* 属、*Adelpha* 属、*Prepona* (?) 属、*Cynthia* 属など、個体数は少ないものが多いが種類数はそこそこ採集できる。メデリンでは *Siproeta* 属なども見られるようになるが、採集の機会が少ないので明らかではない。

Acraeidae (ホソチョウ科) : *Actinote* 属数種を得ている。低地にも見られるが、種類の違いについての詳細は不明。

Lycaenidae (シジミチョウ科) : この科のものは種類数が多い割には資料は少なく、なかなか難しい科である。“*Thecla*” と総称されるカラスシジミの仲間やそのほか多くの種が見られるが、属名すら判らないものが多い。*Arawacus* 属、*Theritas* 属など。翅の裏面が人面のような *Rekoa* sp. をメデリンで得ている。

Riodinidae (シジミタテハ科) : この科は南米にはかなり種類がいるはずであるが、なかなか見られない。*Hades* 属、*Necyria* 属といったところを得て

いる。

Hesperiidae (セセリチョウ科) : この科も Lycaenidae 同様、資料が少なく、難しい科である。Vettius 属, Pyrgus 属, Pyrrhopygopsis 属, Urbanus 属, Achlyodes 属などをあげるにとどめる。なかには青色のものなど、なかなか面白いものも見られる。

蛾もいろいろと見られるが、なにぶん知識不足でよくわからない。移動の習性をもつことで知られる *Urania* sp. (ツバメガの類), Saturnidae (ヤマユガ科) の *Automeris* sp. や *Eacles* sp., Noctuidae (ヤガ科) の *Ascalapha* sp. などが見られるほか, Sphingidae (スズメガ科) も多い。

Coleoptera (鞘翅目) : Scarabaeidae (カブトムシ科) では Dynastini (カブトムシ族) の *Dynastes hercules* (ヘラクレスオオカブト), *Megasoma elephas* (ゾウカブト) といった大物は分布しないが, *Golofa porteri* (ノコギリタテヅノカブト), *G.* sp. (*G. pelagon* に近い種) の2種が分布している。Oryctini (サイカブト族) も *Heterogomphus* sp. など何種類か見られるほか, Cyclocephalini (スジコガネモドキ族) も数種類見られる。Rutelinae (スジコガネ亜科) は *Platycoelia* sp. に近い種など何種類かが分布する。Coprinae (ダイコクコガネ亜科) は、地味な小型種のみ。Gymnetis sp. (ツヤケシハナムグリの1種) も見られる。Passalidae (クロツヤムシ科) は大小2種類がいる。Cerambycidae (カミキリムシ科) では *Trachyderes* sp., *Taenitos* sp. など10種程度は記録しているものの、得られる個体数は少ない。

そのほか、形態的に面白い Orthoptera (直翅目), Hemiptera (半翅目), そして Odonata (トンボ目) も多いが、未調査である。

2. タテヅノカブト属の2種について

P/Blancas には2種のタテヅノカブトが分布している。つまり、*Golofa porteri* Hope (ノコギリタテヅノカブト), および *G. pelagon* Burmeister (ペラゴンタテヅノカブト) に酷似する種 (以下 *G.* sp. と記す) である。

『図説世界の昆虫4』(阪口浩平著, 保育社) に、「*G. porteri* の雄はタケの茎の先端から7~12cmにおいて下向きに止まり、若葉を食べている。2匹の雄が1本のタケに止まるとキイキイ・・・と発音し、頭部の角を相手方の下に差し入れ、相手を茎から打ち落とす。また茎に侵入者が登ってくると、先着の雄は侵入者に対して頭部の角を低く構え、活発に発音を開始し、他の

雄の侵入を防ぐ。付近に雌がいなかったことにより、これらの積極的な行動は、求愛行動ではなくて、食事のテリトリーを侵害する外来者のための防衛手段であり、雄の頭部の角は後食の際の一種の自己防衛の道具として役立つという H.F.Howden & J.M.Campbell (The Coleopteristas Bulletin, vol.28,no.3,pp.107-114.1974) の観察記録がある」という記述がある。筆者も、P/Blancasにおいて上記2種について観察しており、少々異なる点も見られたので以下に記す。

Table 1 は、1987年3月20日より7月20日までの成虫の見られた場所と個体数を示す。G.sp. は観察期間中ずっと見られたほか、12月まで少ないながら認められたが、5月下旬以降はその数は減少し、雌の割合が多くなった。一方、G.porteri が見られたのは5月7日～13日の1週間に限られ、その間は前者の数は一時的に少なくなったとはいえ、同所的に混棲していた。近縁種が同所的に2種混棲しているというものの、この出現期の違いは非常に興味深い。

Table 1. P/Blancasにおける *Golofa porteri* および G.sp.の観察場所と個体数
() 内はP/Blancas以外での記録

場 所	G.porteri			G.sp.		
	雄	雌	計	雄	雌	計
タ ケ	23	3	26	27	23	50
灯 火	(1)	(1)	(2)	19	8	27
その他				1	2	3
計	23(1)	3(1)	26(2)	47	33	80

前記に引用した H.F.Howden らの *G.porteri* での観察では、タケの若芽を食べているのは、そのほとんどが雄であり、雌はほとんど見られず、雄同士の闘争は求愛行動ではないとされている。筆者の観察においても雄23例、雌3例と雄の方がかなり多かったものの、雌も観察され、しかも交尾中のも

のが多く、なかには交尾中のペアにさらに別の雄が交尾を試みている例や、1つの若芽に2頭の雄が同時にいたりしたが、闘争の場面には出会えなかった。以上の観察結果から、本種の後食の場としてのタケの若芽は、交尾の場としても重要と思われる。また、闘争の場面は観察しえなかったものの、角の折れた雄を2, 3例見かけ、角が闘争に使用されているものと想像される。筆者は本種の灯火への飛来は観察していないが、別の場所にて灯火に飛来した雌雄各1頭を友人から譲り受けており (Table 1 に()で示した)、本種も灯火に飛来するのかもしれない。

G. sp. ではタケの若芽で後食する例が、雄27例、雌23例と、雌の割合がかなり多くなっている。発生後期には雌の観察例が多くなり、雌は交尾後もかなりの期間生き永らえ、産卵を続けながらたまに後食に来るのかも知れない。また、本種は灯火にもよく飛来し、その割合は雄のほうが多いようである。本種においても *G. porteri* 同様、タケの若芽上での交尾例を多く観察しており、また1つのタケの若芽上に2頭の雄がいることもあったが、闘争の場面は目撃できなかった。なお、本種の灯火への飛来は、蛾や他の甲虫の飛来の少ない、月のある夜や晴れた夜にも見られ、その影響はあまりないように思えた。

以上、H. F. Howden らの *G. porteri* での観察と筆者の行った *G. porteri* および *G. sp.* の観察の比較を試みたが、両種ともにタケの若芽での摂食行動には、後食という意味だけでなく、求愛行動の場の確保としての意味も重要であろうと思われる。この観察結果の相違は、観察場所 (環境) の違いおよび密度の違いなどによるものかも知れない。

両種は止まっているタケをゆするとすぐ地面に落下し、その再発見は難しい。雌1例の観察では、すばやく地面にもぐるった。また、雄1例の観察では擬死の状態であった。

両種とも、その産卵行動および幼虫の生息場所などについての観察はまだできていない。これらは、さらにつっこんだ成虫の観察とともに、今後の課題である。

III. チェコ (Choco) 州の昆虫

1. バイア・ソラノ (Bahia Solano)

当地には、*Acrocinus longimanus* (テナガカミキリ), *Megaroprepus coerulatus* (ハビロイトトンボ), *Rothschildia* sp. (ロスチャイルドヤマユの1種), *Tropidacris dux* (体長10cmはあろうかという後翅の美しいバッタ), *Agenysa* sp. (ジンガサハムシの1種) といった面白い昆虫や, *Battus*, *Parides*, *Eurytides* (以上アゲハチョウ科), *Phoebis*, *Eurema* (以上シロチョウ科), *Lycorea*, *Danaus* (以上マダラチョウ科), *Philaethria dido*, *Dryas julia*, *Eueides*, *Heliconius* (以上ドクチョウ科), *Pierella*, *Euptychia* (以上ジャノメチョウ科), *Morpho* (以上モルフォチョウ科), *Marpesia*, *Protopogonius* (以上タテハチョウ科) などの熱帯らしいチョウも見られる海辺の村である。

ここでは、バイア・ソラノ付近のジャングル (Selva) で過ごした一夜の話をしてみよう。

1987年3月20日、メデリンよりバイア・ソラノに20人乗りの軽飛行機で向かう。約1時間でバイア・ソラノの海岸の村が見えてきた。コロンビアに来て初めて見る海である。バイア・ソラノには同じJOCVの小川隊員が働いており、虫の採集を兼ねた小旅行である。小川氏に会うと、食事後すぐにジャングルにある農場に行くという。食事もそこそこに、食糧を買い出し、ジープに乗り込む。バイア・ソラノから El Valle に向けて車を走らすこと約30分、農場への道に着く。ここから西側に道を取り、徒歩1時間ほどで、ジャングルの中の掘立小屋につく。よく見ると切り開かれたジャングルに *Platano* (ブラタノ、食用バナナ), *Banano* (バナナ) が植えられている。一行は小川氏、コロンビア人4人 (うち子供2人)、私の6人である。汗でべとつく体を付近の小川で洗い、夕方近くだったが、少し付近をうろついて、*Parides* や *Heliconius* などを少々採集する。暗くならないうちに食事をする。周囲が徐々に暗さを増してくる。ジャングルで迎える初めての夜であり、少々興奮気味である。暗くなったので灯り (ビンに石油を入れたもの) をつける。暗いジャングルの中をホタルが飛び交う。美しい光景である。よく見るとホタルの光の色や飛び方で2種類ぐらいに分かれるようである。大きい黄色味の強い直線的な飛び方をするホタルが、小屋の光をめざして飛び込んでくる。さっそく採集してみると、なんとヒカリコメツキ (*Pyrophorus* sp.) である。スペイン語では *Cucuyu* (ククユ) と呼ぶそうである。初めて見るヒカリコ

メツキに夢中になって採集する。この光の饗宴は日没後2時間ぐらいで終了した。コロンビア人の大人2人は、暗くなると狩りとカワエビ採りに出かけてしまっている。ヒカリコメツキが飛び出すと私もソワソワしだし、さっそくジャングルへ採集に出かける。流れに倒れた木の幹には大きなクモ(5~6cmはあろうか)がたくさん群れている。懐中電灯をたよりに虫をさがすが、Cerambicidae 数種を得たのみであった。小屋に帰るとすでにコロンビア人2人は戻ってきており、私のことを心配していたようである。ジャングルでの初めての一夜とヒカリコメツキに少々興奮気味で、眠気がこないまま小川氏と長い時間話し続けた。

翌朝、カワエビの炊き込みご飯を食べて、また付近を散策する。ジャングルの中は木が高いせいか、幅10mぐらいの流れに沿って歩いても、少し暗い感じで虫はあまり多くない。Heliconius や Parides, Euptychia, Itomidae, Arawacus といったチョウを採集する。かなり遠くに Morpho sp.が飛んで行く。あまりに遠すぎて採集は不可能である。しかし、P/Blancasにいるのとは異なり強い青色をしており、コロンビアにきて初めて見るもので感激する。小屋の近くで Agenysa sp.を見つける。けっこう大きく、濃緑色の地に赤い斑があって美しい。近くには面白いかっこうをしたバッタ類もいる。

そうこうしているうちに、昼近くになってしまった。用事があったので、引き上げなければならない。たった1泊だけのジャングルの夜であったが、あのヒカリコメツキの光といい、Morpho や Agenysa sp.の色といい、楽しい1日であった。成果の割には満足感があった。

2. Rio Jampavado (ハンパバド川)

1987年6月24日、メデリンよりバイア・ソラノに向かう。1日おいた6月26日、バイア・ソラノより小舟でフラドに北上する。約4時間、びしょぬれの船旅である。途中、ペリカンの群れが何度か追い越していく。6月28日、迎えに来たインディオ(Indio)のカヌー(Canoa)でフラド川を遡る。一行は3人のインディオにガブリエル(小川氏のカウンターパート)、小川氏それに私の6人である。フラド川からハンパバド川に入り、約4時間でインディオの村に到着する。メデリンを出て5日目に、やっと目的地に着く。今回は小川氏の天然有用樹種の調査が目的で、私もそれらの害虫調査という名目で同行した。インディオの村に着くと、村じゅう総出で迎えてくれる。子供

の多いのに驚く。Jagua（ハゲア、インディオが使っているイレズミ、同名の木の実）を塗った人や、鮮やかな腰巻をした女性がいる。背は低いがけっこう可愛い。若い女性が多いが、ほとんど既婚者で子供がいる。この村で結局2泊し、付近を散策した。

川岸に発達した砂地の所々には、*Urania* sp.（ナンベイツバメガの1種）や *Papilio thoas*, そして *Marpesia* sp.（ツルギタテハの1種）, *Epiphele*, *Callicore* sp., *Catagramma* sp.などのタテハチョウ科、トンボマダラ科の *Dryas julia*, *Eueides aliphera* などが吸水に訪れている。*Callicore* や *Catagramma*は初めて接するチョウであるが、なかなか美しく可憐だ。残念ながら *Agrias*といった大物はいない。ジャングルに入ると、開けた場所にはドクチョウやトンボマダラの南米らしいものが見られる。カチカチと音をさせて飛ぶチョウがいる。*Hamadryas*（カスリタテハ属）のチョウである。あまりに高くとてもネットは届かない。どうも追尾などの際に、この音を出すようである。白っぽい樹皮をもち、すつとのびた木の幹に止まっている。指をくわえて眺めるだけである。ジャングルでは *Galigo* sp.（フクロウチョウの1種）が突然飛び出す。付近の木の幹に止まったのを採集。ネットに入れてみるとかなり大きく、ばたつく様子は迫力がある。*Pierella* sp.（ハカマジャノメの1種）や *Cithaerias* sp.（スカシバジャノメの1種）といったジャノメチョウ科も見られる。*Cithaerias* sp.はジャングルの明暗のはっきりした中を飛ぶと、すぐ見失ってしまう。ジャングルの明暗の中では、あの翅表の青と翅裏の褐色を交互に見せながら飛ぶ *Morpho* なども実に見にくいものとなる。ジャングルに棲む派手なチョウといえども、それなりの迷彩をほどこしているもののようである。前方をヒラヒラと優雅に飛ぶものが見える。*Megaroprepus coerulatus*（ハビロイトトンボ）である。黒褐色の大きな斑紋のある透明な翅を4枚バラバラ（？）に飛ぶ姿は、幻想的で大変美しい。瞬間、ネットを振るのも忘れて見とれてしまった。まるで天女の羽衣（？）が舞うような気がした。

村に帰ると、赤ん坊が死んだとのこと。村長から、死んだ赤ん坊の写真を撮ってくれ、といわれる。あまりいい気がしないが、仕方なくシャッターを押す。ついでに、村の美人（？）や子供の写真を撮りまくる。ふと見ると、*Historis odius* が止まっている。ネットを持っていなかったので手で採集。

インディオの子供にとり囲まれたのは、いうまでもない。

話は変わるが、前述のJaguaは単なる彩色のためだけでなく、どうも虫除けや虫さされに有効らしい。筆者も体じゅう虫にさされていたので、インディオにすすめられて塗ってみたが、1週間ほど色がとれないものの、虫さされに有効なように思えた。誰かこれの研究をしているのであろうか？

とにかく、たった2泊であったが、インディオは親切で人もよく、なごり惜しさ一杯で村を後にした。ただ、交通の便が悪く、たった2泊3日の調査に2週間も要した。

Ⅲ. 国立自然公園“ロスカティ奥斯”（“Los Katios”）

1987年4月28日～5月6日の9日間、パナマとの国境にある国立自然公園の“Los Katios”で採集を行った。

ツルボ（Turbo）よりボート（Lancha）でウラバ湾（Golfo de Uraba）を渡り、アトラト川（Rio Atrato）を遡ること約4時間で、ロスカティオスの玄関口サウタタ（Sautata）に到着する。ここは、ジャガーなどの肉食動物、各種の霊長類、吸血性コウモリ類、アリクイ、ナマケモノ、アルマジロ、多種多様な鳥類、カイマンやボア、陸ガメなどが生息し、その動物相は豊富である。マバナ（毒ヘビ）、コクイ（毒ガエル）など危険な動物もいる。また Zancudo（ヤブカの1種？）の巣のようなところで、9日間はこの Zancudo 嵐との戦いの日々であった。メデリンに帰ったのち、マラリアのような症状が出た。

主な採集地は、地図に示したように、サウタタ、テンダル滝（Q.Tendal）、ティルボ（Tilupo）、ペジェ（Peye）といったところである。移動は主に徒歩と馬。連日の Zancudo との戦いと、馬上での採集で、思ったほど成果はあがらなかったが、印象に残ったことを記してみよう。

もっとも印象に残ったことといえば、Zancudo の猛襲と、宿泊した小屋での強烈な臭いのコウモリのフン、それにジャガーといったところである。サウタタの自然資源庁（INDERENA）の小屋には毎晩ジャガーが訪れてくる。食堂の残飯や灯火に集まるガマガエルなどを食べにくるらしい。夜間採集で灯火をまわったおりなど、このジャガーにはずいぶんお目にかかった。最も近づいたときは約3m。カメラを向けたとき、ストロボの光に怒ったのか、近

づいてきて吠えたてられた。かまわず、もう1度シャッターを押すと、反対を向いて遠ざかって行った。残念ながら、ストロボとカメラの接触部が故障していて写真は失敗したが、なかなか美しく、可愛いヤツであった。

開けた場所には、シロチョウ科の *Phoebis* 各種や *Eurytides molops* などの *Eurytides* 属のアゲハチョウ科が吸水に来ていた。ある日の夕方近く、多数の *Phoebis* が一定の方向に向かって飛び去って行くので、何があるのかと思いその方向に行ってみると、*Phoebis* 各種の大きな吸水集団があった。直径1mはあろうかと思われ、道のまん中にまっ黄色のじゅうたんを敷いたようであった。良好な吸水場の臭いというものはかなり遠くから、これらの仲間を引き付けるようで、私の見たときは少なくとも数百mぐらいの距離から、まるで先を急ぐように駆けつけていくように思われた。そのほか、開けた場所に見られるものとして、*Lycorea cleobaea*, *Danaus eresimus* などのマダラチョウ科、*Dryadula phaetusa*, *Doryas julia* などのドクチョウ科、そして *Papilio*, *Parides* などのアゲハチョウ科である。ジャングルの入口あたりや林縁部には、各種のドクチョウが見られる。なかには、*Anthomyza* sp. (ヒトリモドキ科の1種) のような擬態の見本のような蛾も混飛している。ジャングルの中に入ると、*Euptychia* などのジャノメチョウ科や *Marpesia* などのタテハチョウ科が多く見られ、ときたま *Morpho gramaensis* (?) や *Caligo* sp. が飛び出す。また、*Eumaeus* sp. (マルバネカラスシジミの1種) というような訳のわからないカラスシジミもいたりする。一度、ジャングルの細道を歩いていたとき、斜面から50cmぐらいの大きさの石が落ちてきたことがある。よく見ると、陸ガメであった。

甲虫のほうは、主に夜間採集を行った。ジャングルでの朽木くずしも何度か試みたが、例の *Zancudo* の猛烈な攻撃の前にあえなく敗退してしまった。得たのは、*Passalidae* (クロツヤムシ科) 1頭という惨めな結果であった。甲虫は時期がよくないらしく、たいしたものは得られなかった。*Strategus* sp. (ミツノカブトの1種)、数種の *Plusioides* (ウグイスコガネの仲間)、*Cyclocephala* (スジコガネモドキの仲間) などが、その主な採集品であった。*Cerambycidae* (カミキリムシ科) も何種類か得られたが、小型種ばかりであった。

おわりに

私の住む Piedras Blancas 周辺や、隣の州であるチェコ州の虫について述べた。調査も不十分であり、採集品も整理中で、また資料も少ないことなど、内容がないものとなってしまった。コロンビアは広く、交通の便の悪いところも多く、まだそのほんの一部にしか触れていない状態である。特にアマゾン (Amazona) に接していないのは残念であるが、この原稿を書き終えしだい、ペルー、ブラジル、コロンビアのアマゾンを見るべく旅立つ予定をしている。南米関係の昆虫に関する資料・情報が不足しており、思うように仕事が進行していない。資料や情報、またお気づきの点があれば、御教授願えれば幸いである。



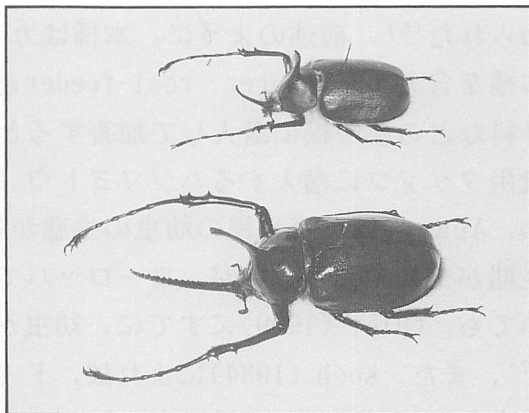
INDERENAの研究所(Piedras Blancas)



Rio JampavadoのIndioの村にて
(1987.6.30; 小川慎二氏撮影)



Danaus eresimus(Peyeにて, 1987.5.5)



Golofa porteri(ノコギリタテツノカブト)